福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1413集

中ノ原遺跡２

－第６次調査－

２０２１

福 岡 市 教 育 委 員 会

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1413集

中ノ原遺跡2

（なかはら）

―第６次調査―

調査番号　1932
遺跡略号　NNH－6

2021

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は共同住宅建設工事に伴う中ノ原遺跡第６次調査について報告するものです。調査では弥生時代と奈良時代の住居跡などが出土し集落の一端を明らかにすることができました。また、奈良時代の土器には「足立寺」の墨書があり、新たな文字資料の発見となりました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、株式会社ラプロス様をはじめとする関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和３年３月25日

福岡市教育委員会
教育長　星子明夫

例　言

1．本書は共同住宅建設に伴い実施した中ノ原遺跡第６次調査の報告書である。
2．本書に使用した方位はすべて座標北で、座標は世界測地系による。
3．検出遺構には検出順に３桁の連番号を与え、性格を示す記号として、SC（竪穴建物）、SK（土抗）、SP（ピット）を頭に付した。
4．掲載した遺物の番号は通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
5．本書に掲載した遺構図は野村俊之、池田祐司が作成した。
6．本書に掲載した遺物の実測図は池田が作成した
7．本書に掲載した挿図の製図は池田が行った。
8．本書に掲載した写真は墨書土器の赤外線撮影を埋蔵文化財センターの松園菜穂が、同じくカラー写真を同比佐陽一郎が撮影し、他は池田が撮影した
9．SC021出土土器の墨書について原田諭氏（福岡市市史編さん室）からご教示を得た。
10．本書の編集・執筆は池田が行った。
11．本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査組織 …… 1
Ⅱ　立地と周辺の調査 …… 2
Ⅲ　調査の記録 …… 4
　1．調査の概要 …… 4
　2．竪穴建物 …… 6
　3．土坑 …… 12
　4．その他の遺物 …… 14
Ⅳ　おわりに …… 16

遺跡名	中ノ原遺跡	調査次数	６次	遺跡略号	NNH−6
調査番号	1932	分布地図図幅名	13雑餉隈	遺跡登録番号	2816
申請地面積	472.78㎡	調査対象面積	250㎡	調査面積	305㎡
調査期間	令和元(2019)年７月18日～８月９日			事前番号	2019−2−345
調査地	博多区光丘町二丁目５番				

Ⅰ　はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、博多区光丘町二丁目５ 番 における戸建住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無の照会を令和元（2019）年６月28日付けで受理した（29−2−345）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である中ノ原遺跡の範囲であり、平成30年12月12日に実施した確認調査で地表下50cmに遺構を確認していた。この結果を受けて埋蔵文化財課は申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取扱いについて協議を行った。その結果、予定建築物の構造および造成計画上、工事による遺構への影響が避けられないため、令和元年に発掘調査、同２年度に整理･報告を行い、記録保存を図ることで合意し委託契約を締結した。申請地472.78㎡のうち調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響がある250㎡である。

発掘調査は令和元（2019）年７月18日から８月９日に実施した（調査番号1932）。調査面積は305㎡で、遺物はコンテナ２箱分が出土した。北側の道路に接した一部は未調査である。

2. 調査組織

調査委託　株式会社ラプロス
調査主体　福岡市教育委員会
調査総括　文化財活用部埋蔵文化財課　　課長　菅波正人
　　調査第１係長　吉武学
庶務担当　文化財活用部文化財活用課　　松原加奈枝
事前審査　文化財活用部埋蔵文化財課　　田上勇一郎　朝岡俊也　山本晃平
調査担当　文化財活用部埋蔵文化財課　　池田祐司

中ノ原遺跡発掘調査一覧

次数	調査番号	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	報告書	時　代	概　要	遺　物	1195集７頁表
雑餉隈遺跡２次	9324	西春町１丁目1-27	19930719～19930806	345	409	弥生・奈良時代	井戸・竈付竪穴建物・土杭・柱穴	袋状口縁壷・土師器・須恵器・転用硯・鉄器・瓦	１次
雑餉隈遺跡３次	9349	西春町１丁目18	19931118～19931204	156	409	奈良時代	竪穴建物４・柱穴	須恵器・土師器・鉄器	２次
１次	0402	光丘町３丁目3-21	20040402～20040419	115.2	年報19	縄文～古墳時代	落とし穴・ピット	土師器・須恵器・黒曜石	３次
２次	0756	光丘町２丁目６	20071127～20071127	15.8	年報22	奈良時代	竈付竪穴建物１・柱穴２	須恵器坏蓋・坏・高皿	４次
５次	1038	西春町４丁目１	20110201～20110416	793	1195	奈良時代	竈付竪穴建物・掘立柱建物・土杭	土師器・須恵器・黒曜石・鉄器	５次
６次	1932	光丘町２丁目５番	20190718～20190809	305	1413	弥生・奈良時代	竪穴建物３・土杭４	土師器・須恵器	

５次調査の報告（1195集）において、当時の中ノ原遺跡の範囲にあった雑餉隈遺跡２、３次調査を中ノ原遺跡１、２次調査に変更し、これに伴って従来の中ノ原遺跡１、２次調査を３、４次調査とし、表として掲載していた。令和２年度に遺跡範囲の検討を行ったところ、以前の雑餉隈遺跡２、３次調査地点は雑餉隈遺跡から続く丘陵上にあたることが確認された。このため1195集で変更した遺跡名と字数は上記のように調査時に戻すこととした。なお中ノ原遺跡３、４次調査については、混乱を避けるために欠番とする。

Ⅱ　立地と周辺の調査

中ノ原遺跡は福岡平野南部の丘陵上に位置し、東を大野城市、西を春日市に挟まれた市域の最南部にあたる。立地する台地は阿蘇４火砕流の堆積物で、浸食により狭い谷が入り八手状に分かれる。周辺の遺跡はこの谷によって遮られた地形的なまとまりごとに、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡、中ノ原遺跡、麦野A遺跡、麦野B遺跡、麦野C遺跡と呼称している（図１）。中ノ原遺跡はこれらの遺跡の最南端にあたり春日市域から北に延びる台地の北側にあたる。狭い谷（図２）を挟んだ東側の台地には雑餉隈遺跡が広がる。

台地上の遺跡では旧石器時代から遺物が出土し、弥生時代には竪穴遺構、墓などからなる集落がみられる。古墳時代には遺構が少なくなるが、８世紀には竪穴建物が一帯に広がり大規模な集落を形成する。この集落については大宰府、水城、大野城などの土木事業ないし維持、営繕に関わるものと推測されている。

中ノ原遺跡ではこれまでに５次の調査が行われているが、今回の調査地点近隣の調査事例は少ない。６次調査の東側隣地での２次調査では８世紀の竪穴建物１棟を確認し、120mほど北東での５次調査では８世紀の竪穴建物12棟、掘立柱建物２棟などからなる集落跡が確認されている。中ノ原遺跡においても周辺の台地と同様に８世紀代の集落が広がることが想定される。調査地点は丘陵の縁辺に位置し（図３）、谷を挟んで東に面する雑餉隈遺跡５・８･10次調査地点では弥生時代の竪穴建物５棟、奈良時代の竪穴建物58棟などの遺構が高密度で確認されており相互の関連が窺われる。

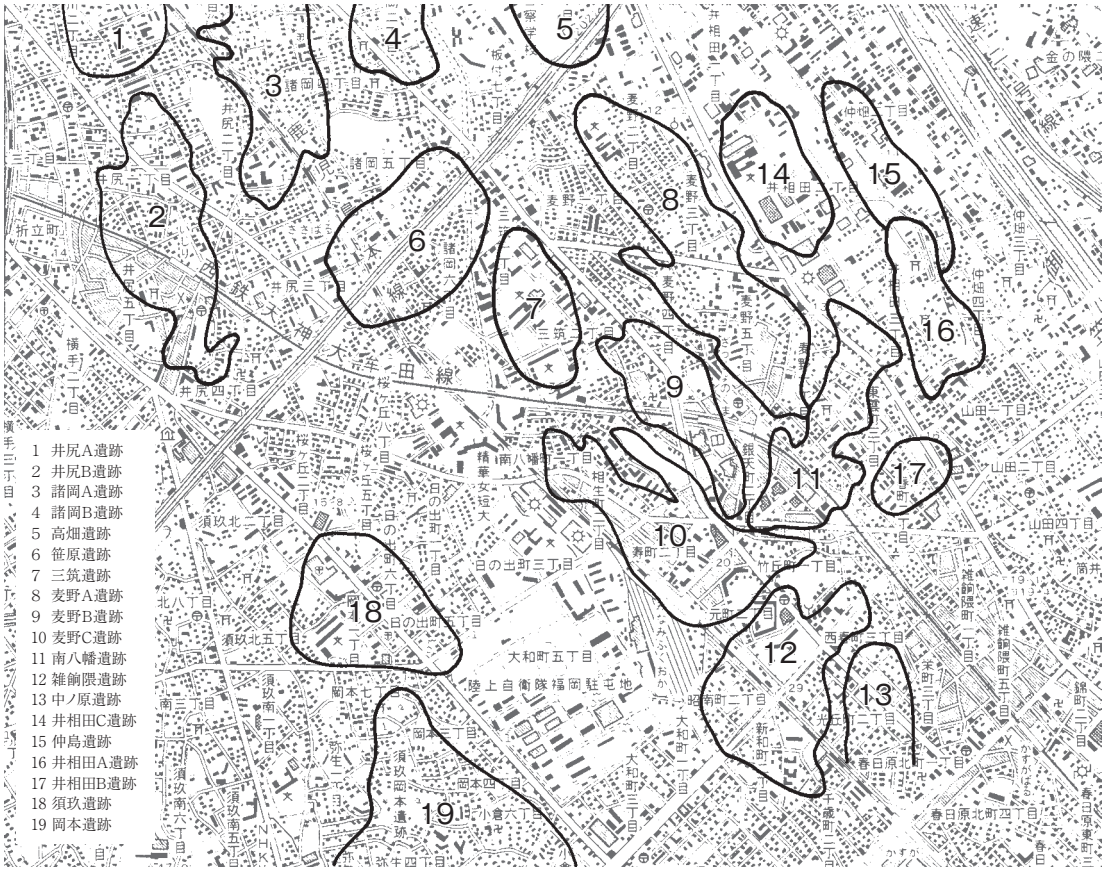

図１　遺跡位置図（1/25000）国土地理院2.5万分１地形図を加工して作成

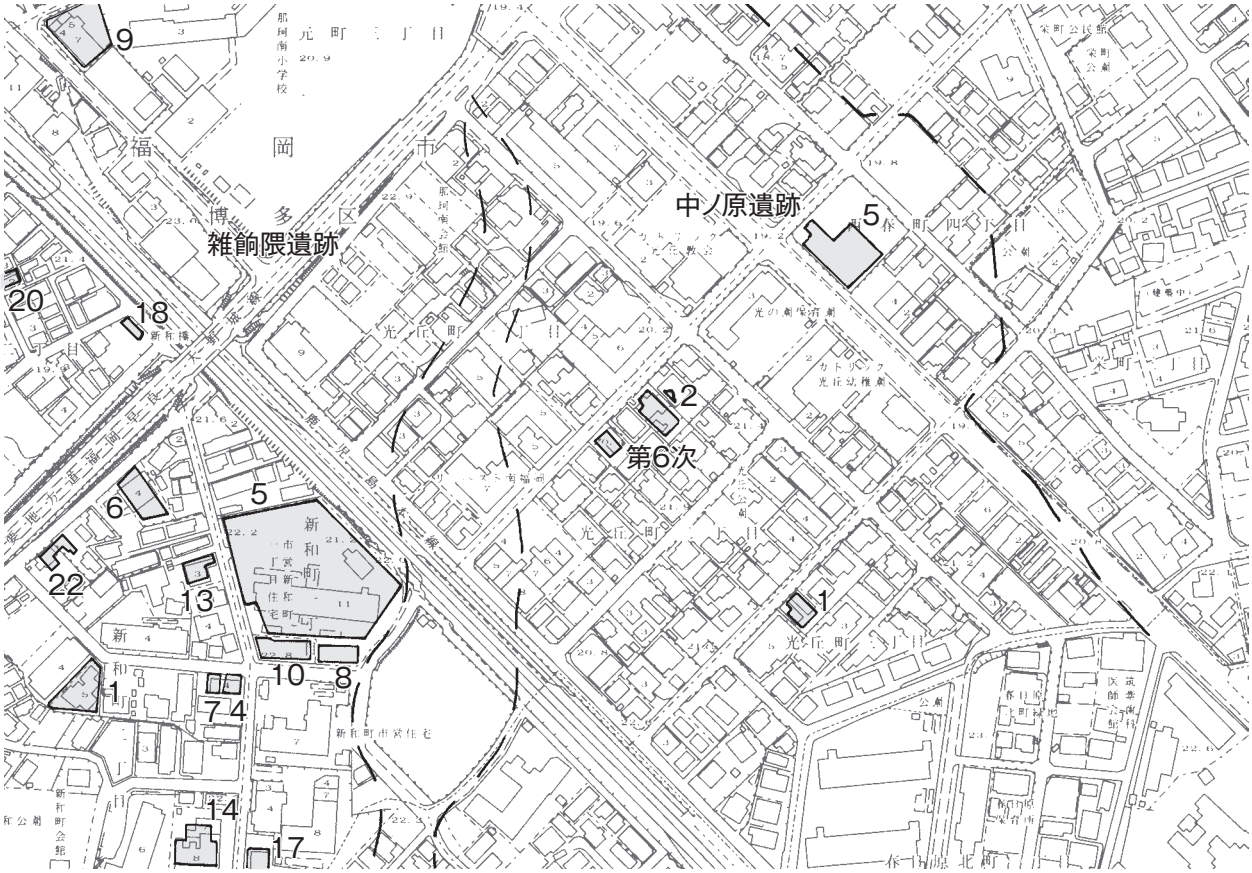

図２　調査地点位置図（1/4000）

図３　調査地点空中写真（約1/4000　昭和23年）国土地理院ウェブサイトデータを加工して作成

Ⅲ　調査の記録

1. 調査の概要

対象地は北西側を道路に面した平面長方形の敷地で、道路より1.2mほど高い。他の面はブロック塀を挟んで隣地に接し同様の高さである。調査着手時は草が茂った更地で、奥（南東）へむかって緩やかに高くなっていた。標高は南東隅で標高22.3mほどである。調査は南東側から実施し、重機による表土除去の後、人力による遺構精査・掘削作業を行った。なお、廃土を場内処理する必要から対象地を３区画に区切って反転し、南東側、中央部、入口の北西側と順次調査を進めた。

遺構面は表土の黒褐色土を除去した鳥栖ローム面で、北西側へ緩やかに傾斜する。北西側10m付近から傾斜が強くなり、北西端3.5mほどは道路面より低くなる。この道路面より低い部分は未調査である。表土の黒褐色土は南東端で厚さ20㎝ほど、中央部は薄く近年の建物建設で削平され基礎等の攪乱が集まる。明確な遺構の分布は緩やかな斜面部の中央より南側である。北側の斜面には黒褐色土が厚く堆積し（写真18）、同様の埋土のピットがみられるが遺物が出土したのは２基のみで土器小片のみである。斜面掘削中には黒褐色土から弥生土器の底部67が出土した。

確認した遺構は竪穴建物３棟、土坑４基、ピットで、竪穴建物のうち２棟は奈良時代、１棟は弥生中期の遺物が出土している。土坑は１基が奈良時代、２基は現代、１基は落し穴かと考えらえる。埋土はおおむね黒褐色土で、黄色の小ブロック・粒を含んでいる。遺物はコンテナケース２箱ほどで、須恵器、土師器、弥生土器が出土し、黒曜石を３点確認した。竪穴建物SC021のカマドには須恵器が据えられ、そのうちの１つの坏の裏に「足立寺」の墨書がみられた。

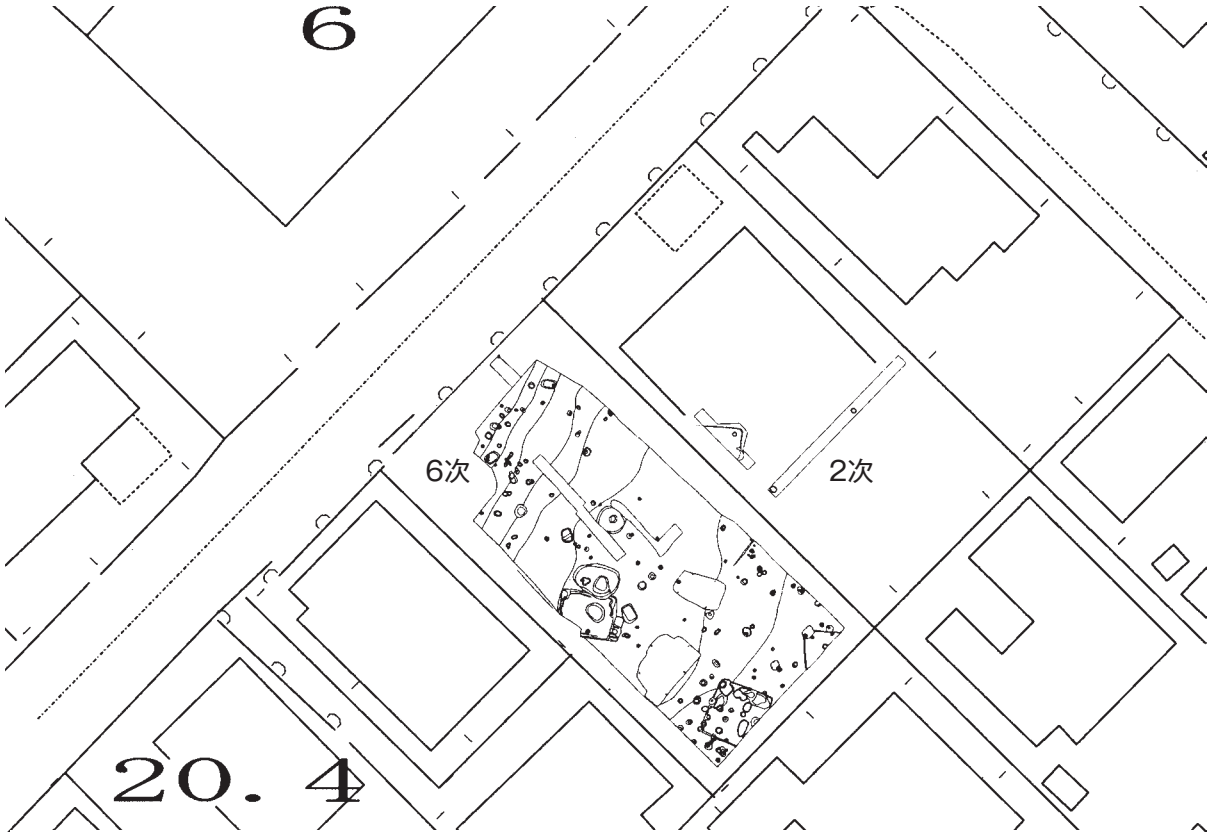

図４　調査区位置図（1/500）

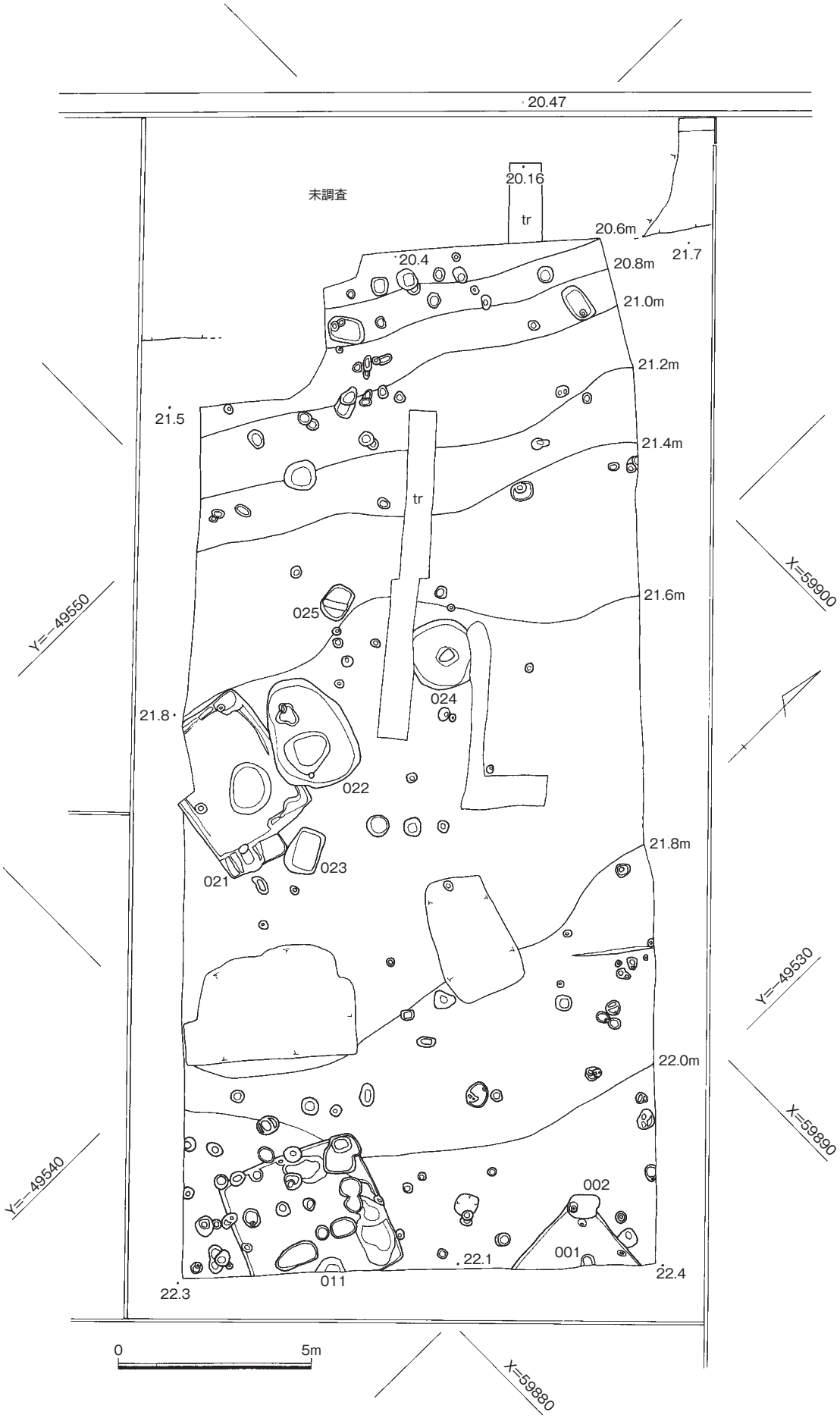

図５　遺構配置図（1/150）

2．竪穴建物

SC001（図６・７）調査区東端部に方形プランの隅を確認した。隅部分は現代の土坑SK002に切られる。確認したのは一辺2.5mほどで、深さは最大で45cmが残る。埋土は黄色ロームブロック、粒子を含む暗褐色土と黒褐色土がレンズ状に堆積し、しまりはない。床面はほぼ平坦で貼床は見られない。柱穴になりそうなピットは見あたらない。埋土出土の遺物から８世紀中頃と考えられる。

出土遺物　遺物は少ないが、須恵器と土師器の小片が埋土から出土した。レベルで上下に分けて取り上げており、１、２、６、10が下部からで他は上部の出土である。１から９は須恵器で、１から３は坏蓋、４から８は坏身である。１は中央部に正置した状態で出土したが、床からは15cmほど浮く。やや明るい灰褐色を呈し、縁がやや暗い。口の一部２ヵ所を欠き、やや歪む。口径14.8cmを測る。２は1/3からの復元口径16.3cmで灰褐色を呈し焼きが良い。内面内側は色調が異なる。３は1/6からの復元口径19.5cmでやや焼が甘く淡橙色から淡灰色を呈す。４は1/4からの復元。５は接合で全体を復元し、口径13.8cmを測る。６は1/4からの復元口径16.2cmで外面は暗い灰色を呈す。７は口縁部の1/2が残り、口径15.5cmを測る。焼きが甘く黄白色を呈す。内面中央に細いへら書きを十字に施す。８は内面に黒褐色の炭化物が薄く付着し光沢がある。９は壺の口縁部で器壁が薄い。10、11は土師器の甕の口縁部で外面体部に縦方向の刷毛目、内面口縁部に横刷毛、胴部に削りがみられる。

SC011（図６・７）調査区南東端で確認した方形の竪穴建物である。平面2.7×2.9mの方形プランで深さ20cm強が残る。南東側の一部は調査区外となる。埋土は暗褐色から黒褐色を呈し、若干の黄褐色小ブロック・粒を含むがSC001ほど多くはない。この竪穴を切るピットもあるが黄色粒を多く含んでいるため検出できた。床はおよそ平坦だが、北西側１mほどが４から５cmほど落ち、北東側にはくぼみ状の土坑がある。北東側と南西側辺の中央にピットがあり底が外に張り出す。近隣では麦野C遺跡５次調査の後期初頭のSC012、092に同様の位置に主柱穴がみられる。遺物は少ないが埋土から弥生中期の土器が出土した。新しい遺物は見られない。遺物から弥生中期中頃の竪穴建物と考える。

出土遺物　12、13は鋤先口縁の甕で小片である。灰橙色から淡橙色を呈す。14は壺の肩部の破片で三角突帯を添付し横なでを施す。胎土に砂粒を多く含むが、突帯部分は少ない、15、16は器台で胎土に砂粒が少なく胎土は細かい。15はほぼ完形に接合した。上部は外反し開くが、中位から下は径２cmほどの穴が底まで貫き、棒状に粘土をまいたかのようである。外面は指抑えが顕著である。16は細かく割れた破片が微妙に接合しない。復元的に作図した。胎土に角閃石を少量含む。17は底部が粘土接合面からはがれる。立ち上がりは急だが壺か。外面は器面が荒れ最下部に刷毛目が若干残る。内面は下部に指抑えがはっきり残り、小動物のかじったような傷が見られる。底部1/4からの復元である。

SC021（図８～12）調査区中央南側で確認した平面長方形の竪穴建物で、東側に張り出したカマドが付く。本体部は3.7×3.06mの規模で、深さ60cmが残る。南西端は調査区を外れ、北側はSK022に切られる。壁の立ち上がりは直に近い。床は平坦で南側がわずかに下がるが、ロームに黒色土が混じった貼床を剥がすと細かな凹凸が広がる。壁際には幅15～20cmの壁溝がめぐる。埋土は灰色がかった黒色土を主体とし黄色ロームの粒が混ざる。南北双方向からの堆積が想定される。上部には黄褐色ローム（２ｂ層）が南東側に広がっており当初カマドとの関連を想定したが、別の堆積である。床面東よりには平面楕円形140×110cm、深さ23cmほどの土坑があり、埋土は黄褐色の小ブロック・粒を多く含む灰黒色土で遺物は出土していない。竪穴建物の時期は遺物から８世紀中頃と考える。

カマドは東壁の南寄りに東へ張り出して地山を掘削し黄白色粘土で構築している。図８に地山の掘方、図９上に検出時の状況、下に構築時の状況を保つと考えられる粘土遺存状況を示した。図８のよ

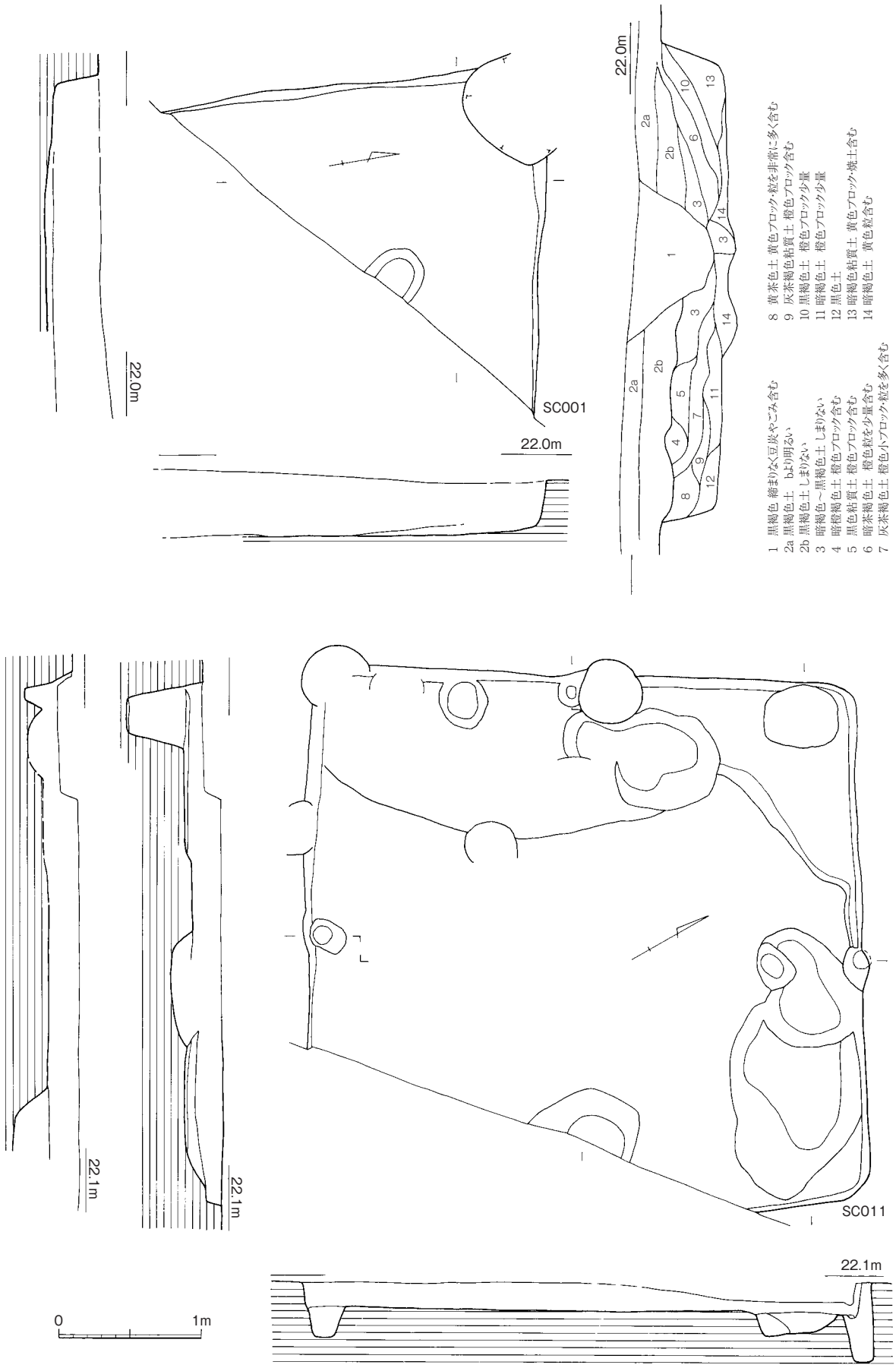

図６　SC001、SC011実測図（1/40）

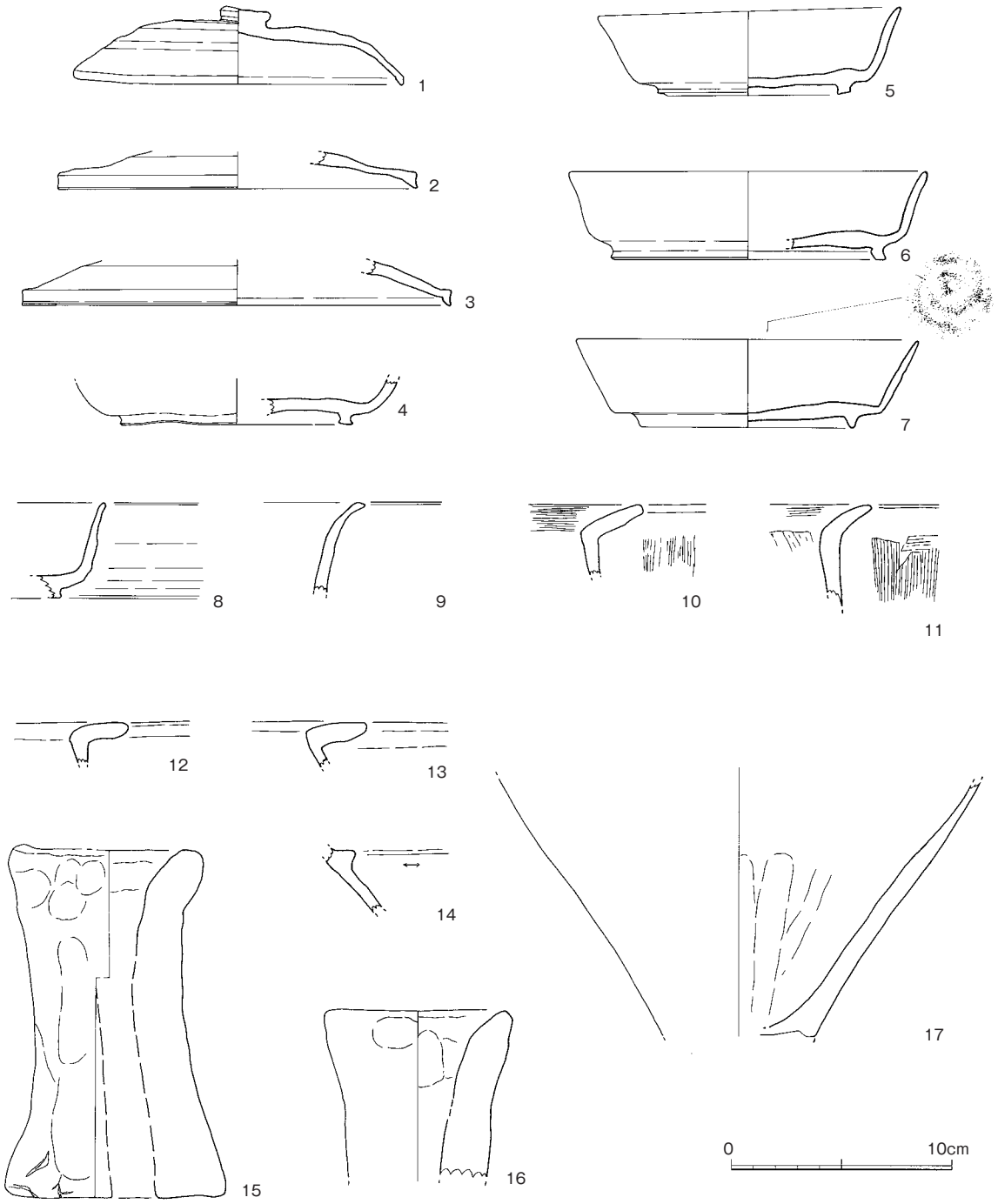

図7　SC001、SC011出土遺物実測図（1/3）

うに幅100cm、奥行70cmほどを長方形に掘削し、南側に２段、北側に１段を設け、底は幅35cm、奥行60cmほどで手前に40×35cmほどのくぼみを掘る。この状態に北側の段と南側の下段の縁から上に粘土で天井部を構築したものと考えられる。北側にはこれらより浅く幅65cm奥行き45cmほどの棚状の段を設けている。棚は５cmほどの残りで、削平が大きければ確認出来なかった。図９上は黒褐色土を除去し粘土が現れた面で、天井部などが壊れた状態である。土層のように底には焼土、炭混じりの黒色土が溜り、その上に焼土と灰褐色混じりの白色粘土が乗っており、この部分は天井等が落ちたものと考えた。粘土の上には須恵器、土師器が置かれたような状態で出土した。これらの土器は粘土を被って

おらず、黒色土を除去後に出土した。20は倒置した須恵器の壺で粘土に接しており、カマド廃棄直後に置かれたものと考えた。ただし天井と共に落ちた可能性も残る。18は20に近いものの間に黒色土が挟まり粘土からも浮いている。北側の段から落ちた、または後に埋土に混じった可能性もある。19の坏は南側の段の壁に粘土との間に薄い黒色土を挟んで立てかけた状態で出土し、上から落ちたような感がある。21はカマド前の北側に床から１、２㎝浮いて正置した状態で出土した。いずれもカマドの廃棄に近い時期に原位置にあった遺物と考える。図９下は壊れ落ちたと考えられる粘土を除去した状

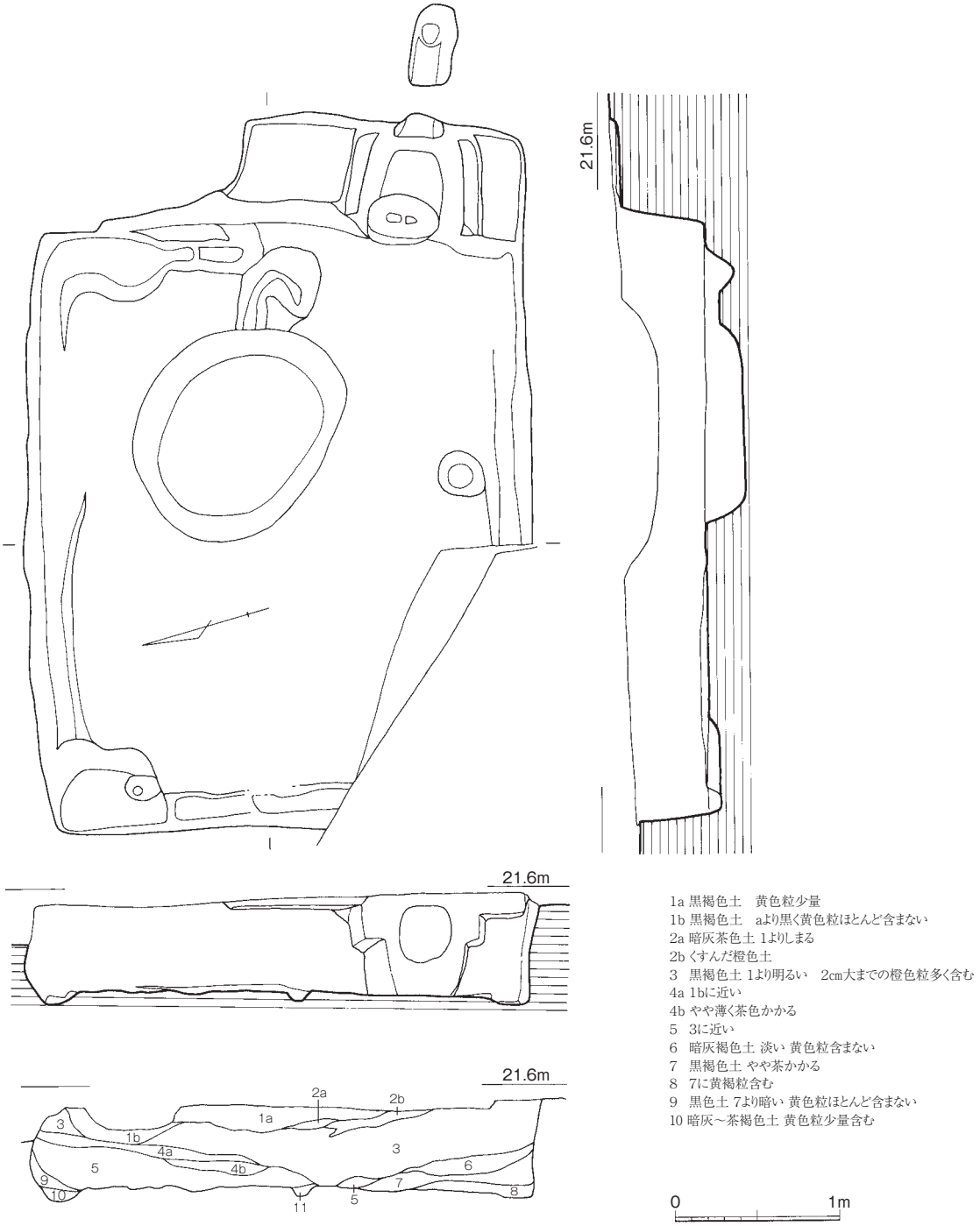

図８　SC021実測図（1/40）

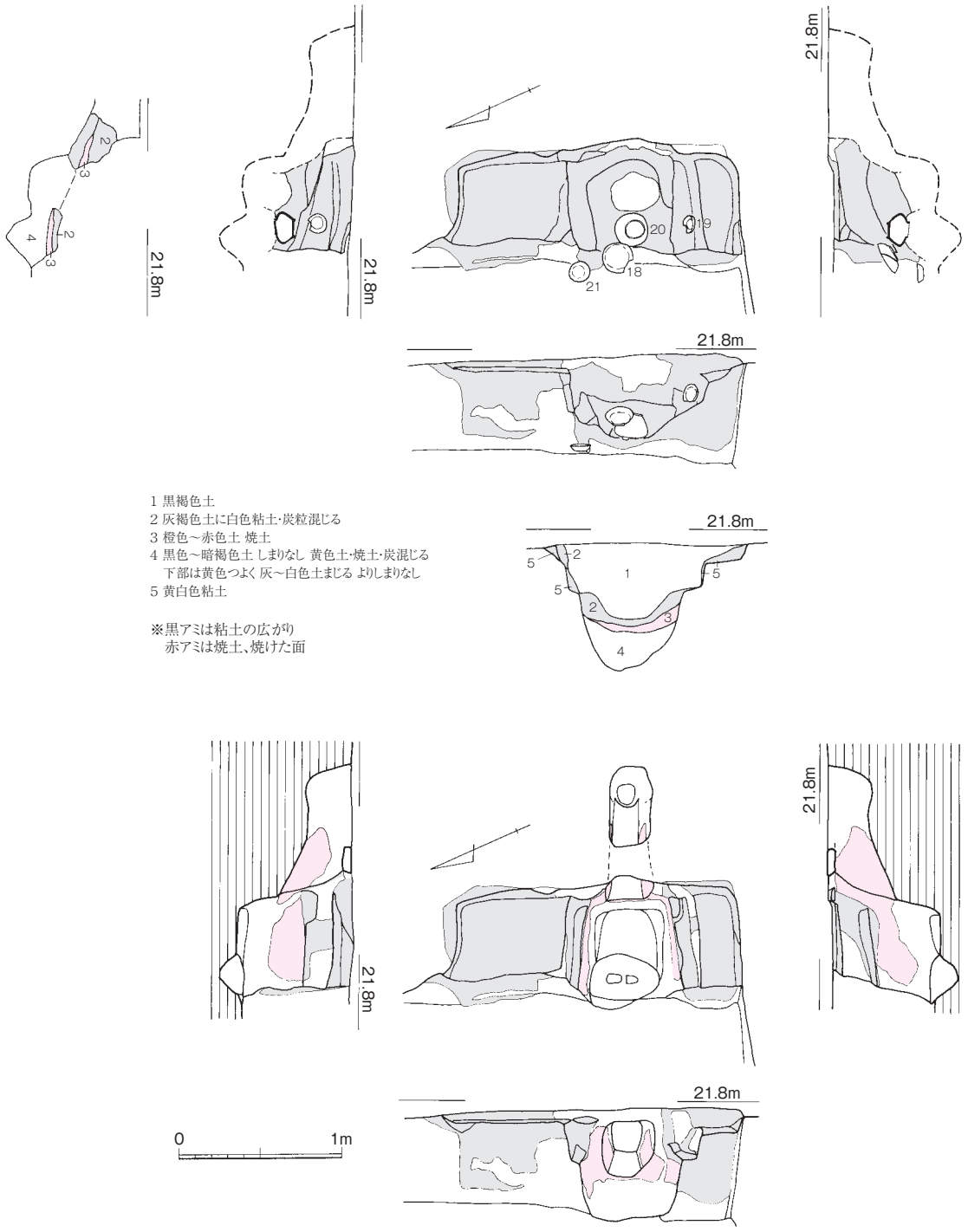

図９　SC021カマド実測図（1/40）

況である。粘土は北側の棚状とその壁、カマド両側の住居側の壁にも貼られている。カマドの奥には煙道が掘られ、長さ50cmほどの隧道が伸び、ピット状の竪坑から外へ出る。幅は内側で30cm、竪坑側で17cmほどである。煙道のカマド側とカマド本体の段より下の上部の壁は赤く焼けている。

出土遺物　遺物はカマドと竪穴の埋土から出土した。18から20は図９上のカマド粘土上で出土した。18は須恵器の坏で体部の一部を欠く。口径18.6 ～ 19cm、高さ5.25 ～ 5.9cmでにぶい灰褐色を呈し砂粒を含む。19は土師器の坏で体部の一部を欠く。外面灰褐色、内面黄褐色を呈し、内面は体部、底に暗褐色で光沢がある薄い炭化物が残り、その周囲は茶褐色を呈す。外面底には墨書がみられ、「足立寺」

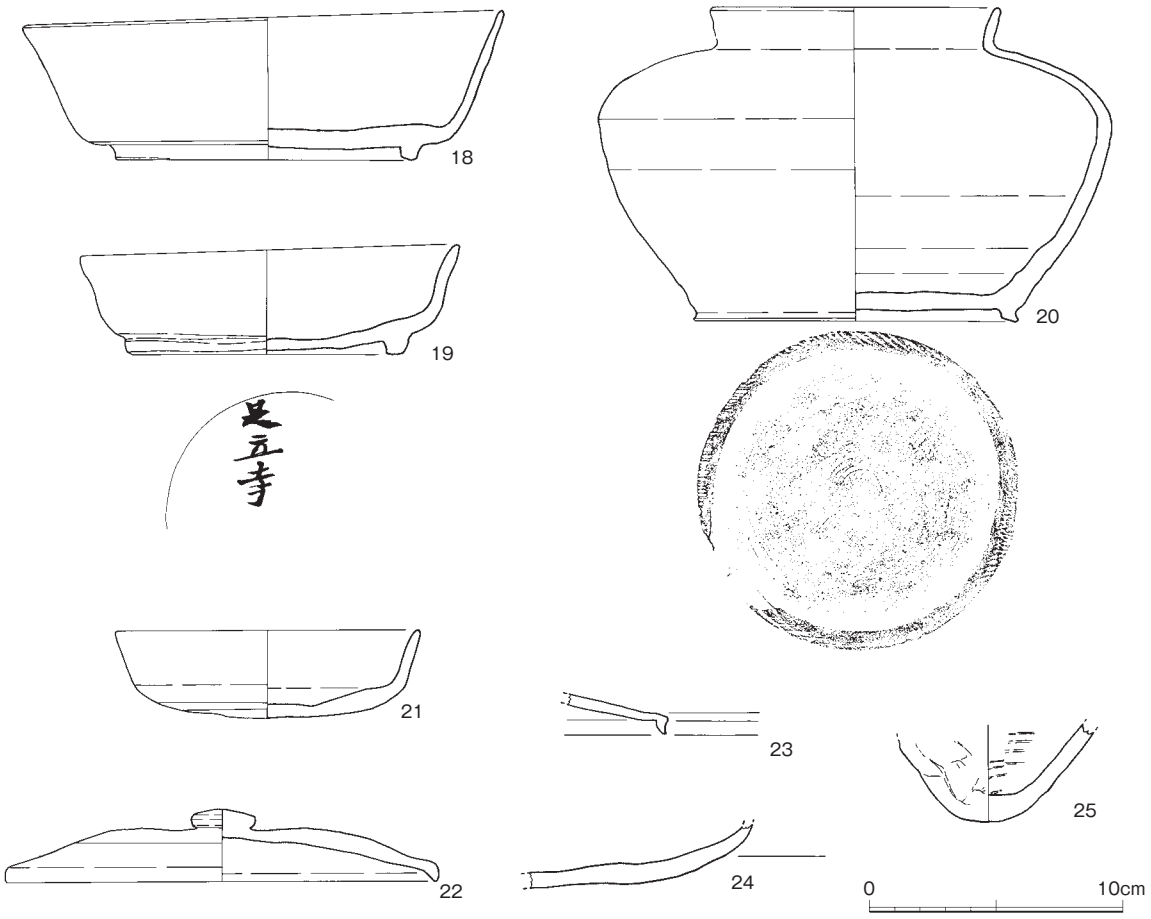

図10　SC021カマド出土遺物実測図（1/3）

と読める。20は須恵器の短頸壺で口縁部3/2を欠く。最大径20㎝、高さ12.5㎝で、灰褐色を呈し外面の一部に自然釉がみられる。畳付には４種類の幅の平行する工具痕が残る。21は坏でカマドの前に正置して出土した。焼きが甘く黄白色を呈し、胎土は細かく砂粒はわずかである。内面に暗褐色で光沢がある付着物がわずかにみられる。口径12㎝。22 ～ 25はカマド内の埋土出土である。22、23は坏蓋で22は生焼けで黄白色を呈す。1/4からの復元。24は土師質で高坏の坏部か。外面に回転削りと研磨痕がみられる。25は土師器の底部で橙茶色を呈す。内面に当て具痕状の痕跡、外面は浅いひび割れ状がみられる。

26から38は竪穴埋土からの出土で28、33、36は床付近出土である。26から35は須恵器の器形だが、28、29は土師質である。26は坏で底1/3からの復

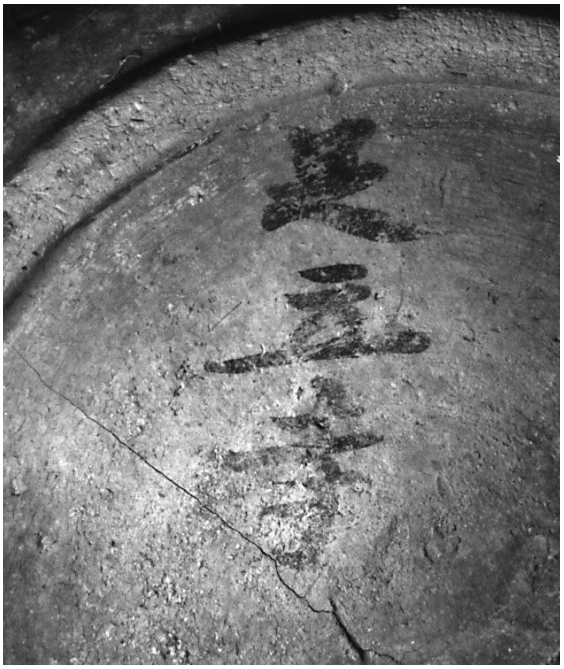

図11　SC021出土墨書土器赤外線写真

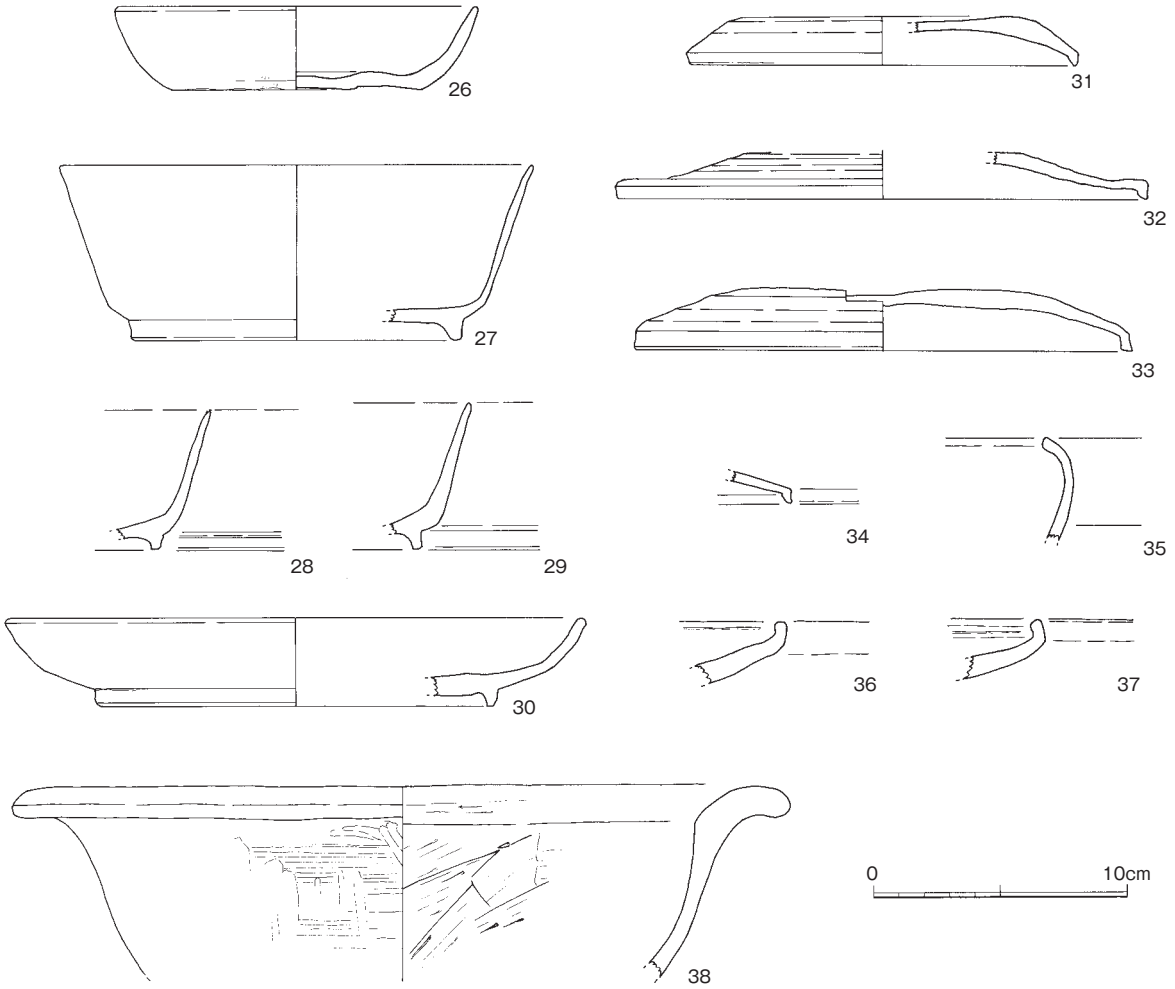

図12　SC021出土遺物実測図（1/3）

元である。底外縁には20の畳付と同様の痕跡が残る。27は生焼けに近く黄白色の胎土で1/4からの復元である。28､29は土師質で２㎜大の砂粒を少量含み淡橙色を呈す。30は高台付の皿で1/6からの復元。31から34は蓋。31は1/3、32は1/6、33は回転なでの中心からの復元である。35は口縁部が内湾する鉢。36、37は土師器で皿状を呈す。38は土師器の鉢で口縁部内外面に横なで、外面なで、内面削りを施す。黄茶色を呈し、砂粒を多く含む。1/3からの復元である。

3．土坑

SK022（図13）　調査区中央に位置しSC021を切る。南東側が幅広の平面不整楕円形で長さ300㎝、幅220㎝、深さ30㎝ほどで、壁はやや緩やかで、床は南西側よりの中央へ下がる。さらに２箇所で不正円形のくぼみ状に落ちる。埋土は黒褐色土で黄色粒を含むがSC021と比べるとわずかで小さい。埋土から須恵器片を中心に遺物が出土した。８世紀中頃でSC021と大差ない。

39から51は須恵器である。39から45は高台付の坏、39は1/2弱、40は1/4、42は1/4からの復元で、41は体部の1/3以上を欠き口径13.7㎝を測る。39、40もほぼ同じ復元口径である。43は高台と底部外

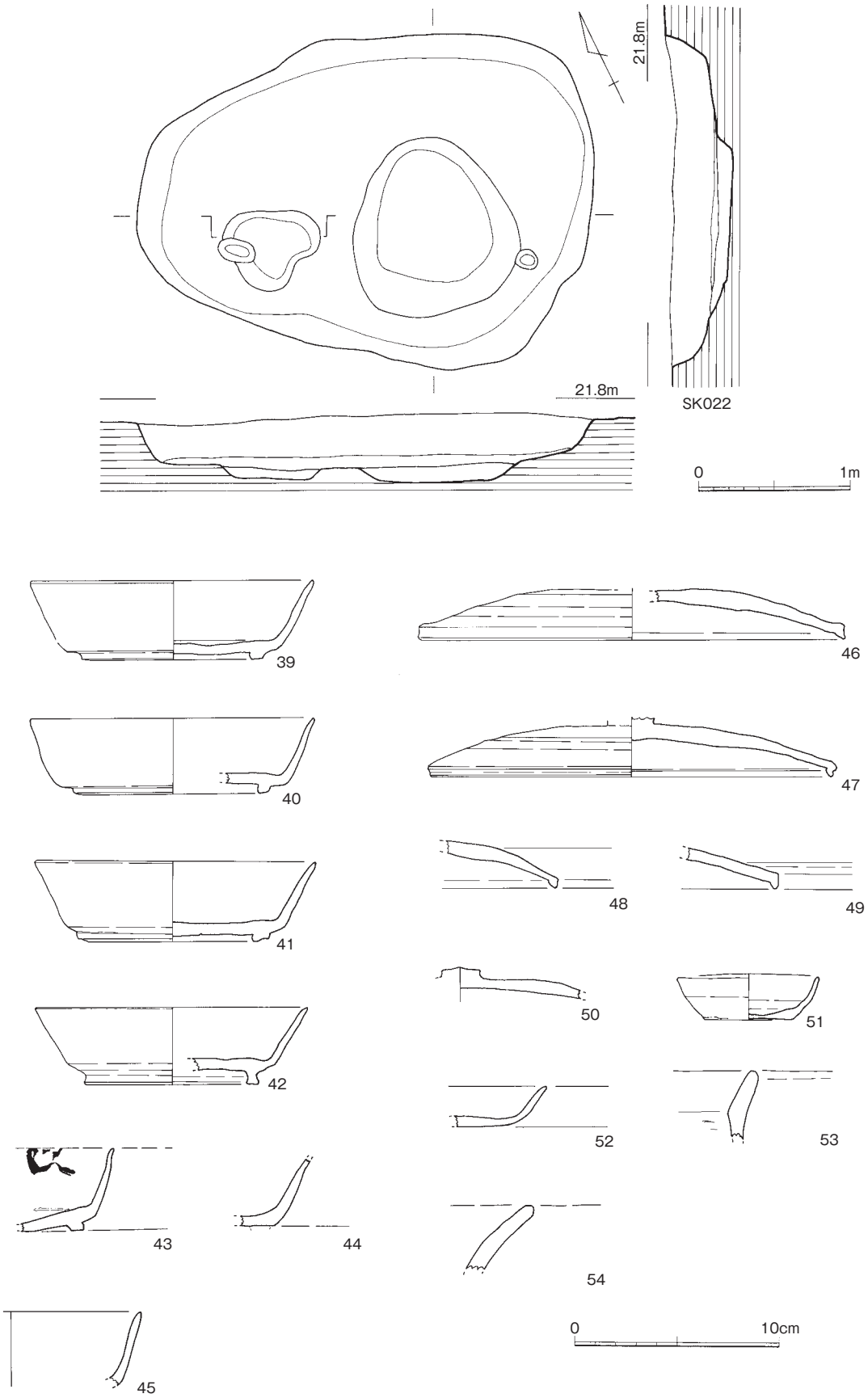

図13　SK022・SK022出土遺物実測図（1/40・1/3）

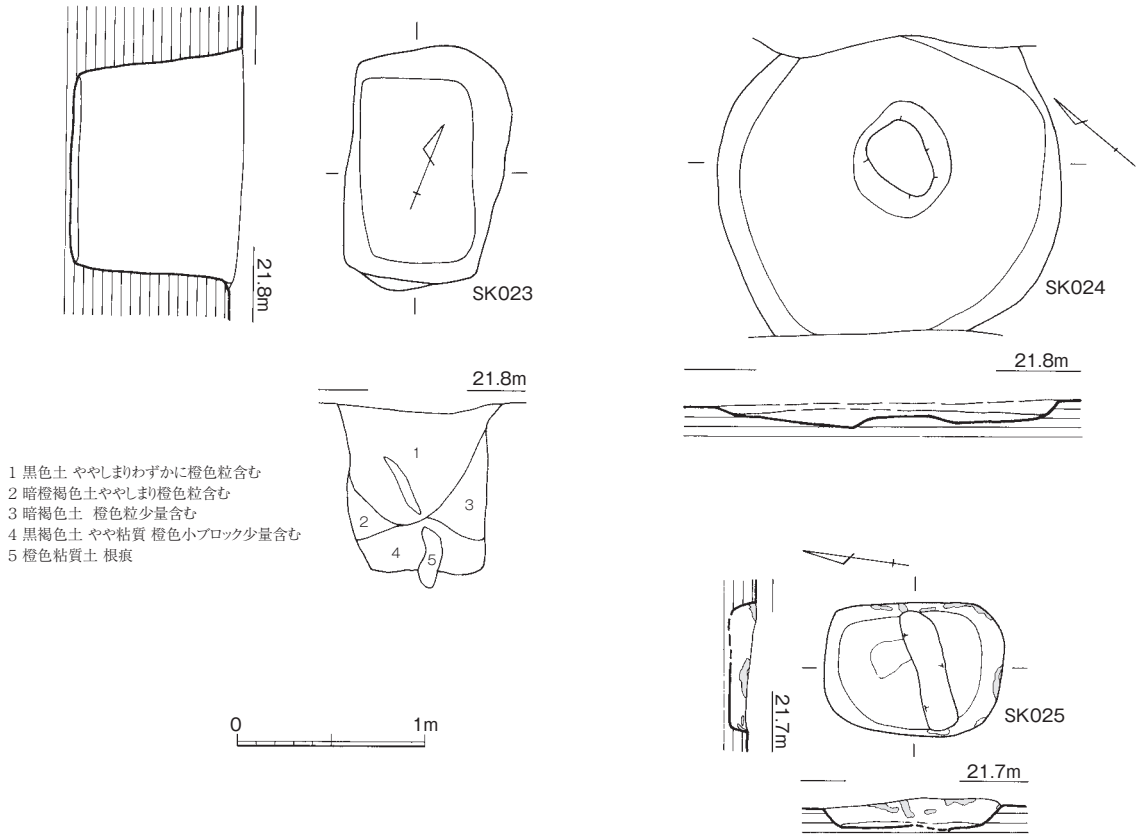

図14　SK023、024、025実測図（1/40）

面を同時に擦るように削っている。割れる以前であれば体部を含めて輪状に分断することになる。内面には黒色の薄い付着物がみられる。44は高台が剥げた痕跡がある。45は坏の体部状だが外面の回転なで痕が顕著で異質に見える。46から50は坏蓋である。46は1/2弱からの復元でやや焼きが甘い。47は口縁部の1/4が残りつまみ中央からの復元である。回転削り痕が顕著で、細く浅い平行沈線がみられる。51は小型の皿、52は皿。53、54は土師器の甕の口縁部で53の内面は削り調整である。

SK023（図14）調査区中央部で検出した平面120×85cmの長方形で深さ90cmの規模である。壁は急に立ち上がり、床は平坦で100×60cmを測る。埋土は黒色土で細かな黄色粒が入る。中央に小穴があるが根の跡である。遺物は確認していない。時期は不明だが落し穴の可能性を考えている。

SK024（図14）調査区中央の円形の浅いくぼみ状で南西側を試掘トレンチ、北東側を現代の基礎で切られる。径140cmほどの規模で深さ10cmほど。中央に高まりがあり輪状にくぼむ。埋土はしまりのない茶がかった黒色土で中央に少量の炭化物がみられる。遺物は出土していない。現代か。

SK025（図14）隅丸長方形の浅い土坑で長さ95cm、幅70cm、深さ12cmほどを測る。南側と東側の壁が焼け、床の一部もうすく赤らむ。埋土は黒褐色土で遺物は出土していない。

4.その他の遺物

SK002（図15） SC001の北東端を切る現代の掘り込みで攪乱として認識した。ガラス瓶を中心に

まとまった遺物が出土したため図示する。55、56は底に同じロゴを持つほぼ同型の透明瓶で56の底にAICHI　TOMATO　COの銘がみられる。57は暗い青色のガラス瓶で中央に55に近いが小ぶりのロゴがみられる。58は青色透明で側面下部に「磯志まん」の文字がみられる。59は透明のガラスに穴あきの赤いプラスチックの蓋が付く。AJI-NO-MOTO等の印字が薄く残る。60、61は透明瓶に白色塗装の金属製の蓋が付き、蓋に一部残る文字が「KEWPIE BRAND」と考えられる。62は透明瓶で細かな気泡が多い。左右に異なるスケールのメモリがみられる。63はネジ式の蓋が付く小瓶で外面はすりガ

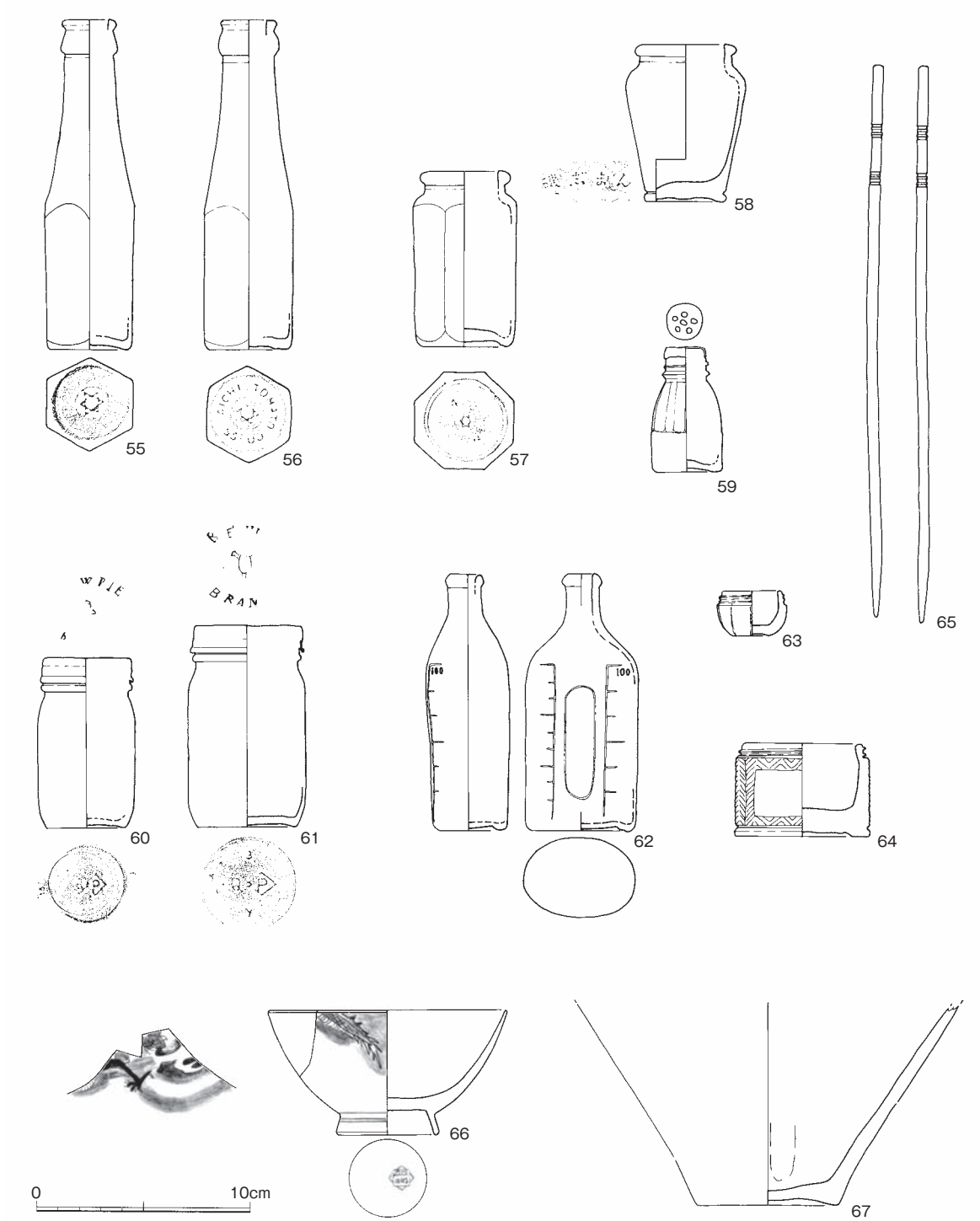

図15　SK002・その他の出土遺物実測図（1/3）

ラス状で縦方向の線状の突起が10本ある。64は乳白色のガラス瓶でネジ式の蓋が付く。綾杉状の装飾がなされ、ラベルを貼る部分は空く。ポマードの瓶。65は銅製の箸。断面円形で長さ26cmほどである。66は磁器の椀で体部を大きく欠き、反転復元した。深い青で龍を描き、尾の先は赤く縁取る。外面底には赤色で「波佐見焼」の銘がみられる。昭和30年頃のまとまった資料と考えられる。

67は調査区北西端の斜面掘削時に黒褐色土から出土した。弥生中期の壺の底部と考えられる。上げ底で内面に指抑えが残り、外面は荒れ、小動物による傷状がみられる。器壁は薄く丁寧なつくりで、胎土には砂粒を多く含む。

Ⅳ　おわりに

弥生時代と奈良時代の遺構を確認した。周辺の雑餉隈、南八幡、麦野A、B、C遺跡では、弥生時代の後は、８世紀に急に集落が築かれ９世紀には消えることが確認されており、奈良時代の集落の特異性がしばしば語られる。中ノ原遺跡の丘陵での調査例は少ないが、５次調査や今回の東側隣地での２次調査においても８世紀代の竪穴建物が検出されており、同様の集落が広がると想定できる。今回の６次調査でも２棟の竪穴建物と１基の土坑を確認し、丘陵の落ち際ということもあり遺構の残りも良かった。特にSC021ではカマドが煙道まで残り、カマド廃棄後のまとまった遺物を得ることができた。カマドは作り出しで方形の形がはっきりし、浅い段を持ち、平面、竪穴側面に粘土を貼った構造で、周辺のカマドのなかでは特異な感がある。

弥生時代では中期の竪穴建物を確認した。西側の谷を挟んだ雑餉隈遺跡では５次調査で弥生前期の円形竪穴建物、15次では早期の木棺墓が出土し、麦野Ｃ遺跡では後期初頭の集落が広がる。弥生時代には比較的小規模な集落が展開することが予想される。

最後に、SC021カマド出土墨書土器の「足立寺」について触れておきたい。まず寺の名としては、京都府八幡市の寺址に和気清麻呂伝説に寺名の由来を持つ足立寺（そくりゅうじ）があるが、発掘調査で７世紀代の遺物が出土し、現在では西山廃寺と呼ばれている。和気清麻呂の伝説を没年の延暦18（799）年以降とすると、墨書土器の年代の８世紀中頃とは前後する。同様に北九州市小倉北区の足立山など和気清麻呂の伝承に伴う地名は該当しないと考えられる。次に古代の地名に、武蔵国足立郡、陸奥国安達郡がみられる。東国からは防人、俘囚が九州に配置されており関連がある地域である。俘囚については松村一良らによって遺構・遺物からも検討が加えられている（松村2013）。松村は中ノ原遺跡に近接する雑餉隈遺跡を東北系集落と位置付け、東北系の特徴として方形竪穴の北辺に貼付けカマドと長煙道を持つ住居形態、薄手の長胴・平底の土師器甕と内黒土器椀の土器様相をあげている。今回のSC021のカマドは南東辺に作り出し、煙道は長めではあるが顕著ではない。遺物は在地に一般的なもので、特に東北系の特徴はみられない。ただし松村も東北系の特徴に時間的変化を認め、雑餉隈遺跡を変遷の中間的な様相とする。墨書との関連は判断できないが、集落の成立の背景として考慮する必要がある。また、他に今日に伝わらない寺名の可能性もとどめておきたい。いずれにしても未知の寺名、地名を示す文字資料であり、この地域の集落を考える上で興味深い例と言えよう。

主な参考文献

角川文化振興財団編 1999 古代地名辞典　角川
松村一良 2013 西海道の集落遺跡における移配俘囚の足跡について　内海文化研究41号

1 南東側全景 北から

2 中央部全景 東から

３ SC021 北西から

4 SC021 南から

5 SC021カマド遺物出土状況 北西から

6 SC021カマド 西から

7 SC021カマド完掘 北西から

8 SC021カマド完掘 北から

9 SC021カマド粘土除去後 北西から

10 SC021カマド粘土半裁 北西から

11 SC001 西から

12 SC001土層 北西から

13 SC011 東から

14 SK022 南西から

15 SK023 北東から

16 SK025 北東から

17 SK024 南東から

18 北西側 全景 南から

SC021出土墨書土器

SC021カマド出土土器

報　告　書　抄　録

ふりがな	なかのはらいせき2
書　名	中ノ原遺跡２
副書名	第６次調査
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1413集
編著者名	池田祐司
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2021年３月25日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号	（世界測地系）				
なかのはらいせき 中ノ原遺跡６次	はかたくひかりがおかまち 博多区光丘町二丁目５番	40132	2816	33.53895	130.466476	20190718 ～ 20190809	305㎡	住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
中ノ原遺跡６次	集落	弥生時代中期、 奈良時代・現代	竪穴建物･土坑・ピット	弥生土器、土師器、須恵器 墨書土器、ガラス瓶	
要約	中ノ原遺跡は北へのびる丘陵上に広がり、調査地点はその西側の丘陵落ち際に位置する。 遺構面はクロボク状の黒色土を除去した鳥栖ローム上面で、北西に緩やかに下がり、調査区北側で傾斜が急になる。 検出した遺構は方形の竪穴遺構３基（住居跡）、土坑４基、ピットである。竪穴遺構は１基が弥生時代中期、２基から８世紀の遺物が出土した。SC021には張り出し部に煙道付きのカマドが付帯していた。このカマドでは廃棄後の白色粘土上でほぼ完形の須恵器の短頸壺１個、坏２個が出土した。坏の底部外面には「足立寺」の墨書がみられる。土坑SK022は長楕円形の浅いくぼみ状でSC021を切り、８世紀の遺物が出土する。SK023は150×100㎝、深さ90㎝の規模で落とし穴の可能性が考えられる。ピットは散漫に点在し、多くは根の痕跡である。 出土遺物は主に竪穴遺構、SK022で出土したが多くない。須恵器、土師器、弥生土器が出土している。黒曜石は２点を確認している。 これまでの調査でも８世紀を主とした竪穴遺構が出土しており、奈良期の集落の広がりが予想できる。				

中ノ原遺跡 2

第 6 次調査
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1413集
2021（令和 3 ）年3月25日発行
発行　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷　魚住印刷
　　福岡市博多区大博町8－20